

日本語学習者のメール文に見られる「断り」

ジェシカ・レウン*

1. はじめに

「断り」とは、相手の意向を受け入れないことを相手に伝える発話行為である。依頼や誘いを断る際、その場にふさわしい配慮やポライトネストラジェーを使わねば、相手との関係を損なう危険性がある。しかしながら、場面に応じてその社会やコミュニティで適切だと思われる発話やストラジェーを選ぶのは、目標言語における社会文化的知識が欠如していることの多い非母語話者にとっては特に難しいことである。

第二言語学習者が接触場面において目標言語を話す場合、自らの母語からのプラグマティック・トランスファー（語用論的転移）が生じる可能性がある。それは、言語使用の適切さを判断する時、自らの母語の規範に依存すること、または、発話行為を実現する時、言語形式の選択において母語の影響を受けることがある（吉富2012）からだ。つまり、目標言語と母語の社会文化的規範が異なる場合は、誤解を生む原因となる可能性がある。

本研究は依頼に対する断りに焦点を絞り、日本語母語話者と日本語学習者が場面に合わせて使用している表現やストラジェーがどう異なるかを明らかにし、日本語学習者の語用論的特徴を考察しようとするものである。

2. 先行研究

断り行為の研究においては、Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990) が代表的である。Beebe 他 (1990) は、日本人英語学習者の英語における断り発話を「意味公式」(semantic formula) と名付けられた最小機能単位に分割し、分析した。Beebe 他 (1990) が提案した意味公式は数々の研究で分析枠組みとして援用されてきた。

これまでの断りに関する研究では、アジア圏の日本語学習者を対象としたものが多く（中井他2018、吉田2013、王2013、蒙2008など）、英語母語話者の日本語学習者を対象としたものは少ない。

生駒・志村 (1993) と Henstock (2003) は、アメリカ人日本語学習者を対象に、談話完成テスト (Discourse Completion Test) というデータ収集方法を用いて、学習者の断り方に英語から日本語へのプラグマティック・トランスファーが見られたと指摘した。しかし、被験者に話し言葉を書かせるという談話完成テストの不自然さの点で限界があり、これらの先行研究のデータ収集方法の妥当性は疑問である。

日本語学習者の非対面コミュニケーションの場面での断りに関する研究は、学習者の手紙に見られる断りを分析したもの (Ohashi 2000)、または、電話会話における断り談話を分析したもの (Kawate-Mierzejewska 2009) がある。Ohashi (2000) も Kawate-Mierzejewska (2009) も学習者と日本語母語話者の比較に着目した研究で、非日本語学習者の英語母語話者を対照グループにすることは

*ニューサウスウェールズ大学 (Honours)

せず、プラグマティック・トランスファーの影響を検証することはしなかった。

近年、コミュニケーション手段として電子メールが広く利用されるようになったが、筆者が調べたところ、英語母語話者である日本語学習者の断りのメールに着目した研究は見当たらない。そこで、本研究は、英語を母語とする日本語学習者の断りのメール文を分析し、日本語学習者と日本語母語話者にどのような違いがあるか、母語からの影響が見られるかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

本研究は、国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」のデータの中から、日本語母語話者48名 (JJ)、英語を母語とする日本国外の日本語学習者23名 (EJ) の日本語作文データと、I-JASと同様に収集した英語母語話者の非日本語学習者15名 (EN) の英語作文データの合計86名の作文データを研究対象とした。EJ 23名の内、11名はオーストラリア在住で、12名アメリカ在住であり、日本語のレベルは、初級から上級前半までとなる。15名のENは全員オーストラリア在住である。

断り場面のメール文の指示は、次のように設定されている。

あなたが日本に留学していたとき大変お世話になった鈴木愛子先生からメールが届きました。来月、学会でああなたの国に来ることになりましたが、学会は2日で終わるので、そのあと、あなたに観光案内してほしいというものです。ところが、あなたはちょうどその日に別の用事があって、どうしても観光に付き合うことができません。鈴木愛子先生に返信のメールを書いてください。

本研究では、ワラシー (2016) の分類を参考にし、メール文の構成を「開始部」「主要部」「終了部」の3つのパートに分割した。主要部は、断りを表す最も重要な部分である。主要部の前後に出現する開始部と終了部は、断る意思を伝えるよりは社交のためのものとなり、「メールありがとうございます」のような礼儀正しさを挨拶を表す表現が含まれる。断りを行う主要部をさらに以下の4つの種類の意味公式に分類した。

- ① 【断りの明示】：断る意思の表明
(例：案内することができません)
- ② 【理由】：相手の期待に添えない理由の説明
(例：用事があるので)
- ③ 【提案】：代替手段の提示
(例：2日以降ではいかがでしょうか)
- ④ 【思いやり発話】：謝罪表現や共感を含めて、相手の期待に添えないことを残念に思うことの表明
(例：残念ながら)

以下の主要部の例は、【思いやり発話】／【思いやり発話】／【理由】／【断りの明示】／【提案】というように分析する。

残念ながら／申し訳ないけど／その日にはもう約束があるので／鈴木さまの案内になる事はできません。／その代わりに、私と一緒に晩御飯を食べに行くのはどうですか。

(EAU07-m3)

Bardovi-Harlig (2001) によると、母語話者と非母語話者の発話行為は基本的に意味公式の使用・内容・形式に違いが見られる。これをもとに、この3つの観点から、JJ、EJ、ENの断り行為を比較し、分析を行った。

4. 結果と考察

グループごとの意味公式の平均出現頻度は、以下の表1の通りである。

表1：主要部の意味公式の平均出現頻度

意味公式	JJ	EJ	EN
断りの明示	0.90	0.83	0.53
理由	1.06	1.00	1.07
提案	0.52***	1.04	1.47
思いやり発話	2.23***	1.43	1.27
その他	0	0.09	0.13

*** $p < .001$

Welch's ANOVAを行ったところ、JJはEJ・ENとの間に有意な差が見られた。EJの【提案】の使用頻度がJJと比べると高く ($F(2, 32) = 11.084$, $p < .001$)、【思いやり発話】の使用頻度が低い ($F(2, 39) = 10.782$, $p < .001$)、という結果が出た。英語母語話者のEJの日本語とENの英語の間には差が見られなかったため、これらの意味公式の使用頻度の差の原因はプラグマティック・トランスファーの影響だと考えられる。日本語母語話者より、英語母語話者の方が【提案】を多く使うという結果は生駒・志村(1993)の結果と異なるが、日本語母語話者の【提案】の使用頻度の低さはシナリオの影響であろうと思われる。Henstock(2003)でも、依頼側・誘い側が目上であれば、日本語母語話者は【提案】をあまり使わないという傾向が見られた。日本語母語話者の【思いやり発話】の多用も、Beebe他(1990)にも似たような結果が見られた。

【提案】の内容にも、JJとEJ・ENの間に相違があった。EJとENのメール文では、「日程の変更」が比較的によく見られたが、JJのメール文では、「メールで観光スポット・レストランを紹介する」のが多かった。EJはENと似たような傾向があったため、これもプラグマティック・トランスファーの影響であると思われる。このような違いは先行研究には見られなかった結果であり、原

因を明らかにするためにはさらなる研究が必要である。一つの可能性としては、日本語母語話者は、別の日に変更してもらうことは、相手に、特に目上の相手に「迷惑」をかけてしまうと思っているからではないかと予想される。

メールの開始部にもプラグマティック・トランスファーが見られた。JJはメールの開始部に名乗りとメールのお礼をよく使用していたが、EJとENのメールにはあまり見られなかった。逆に、EJとENは好意的な表現をよく使用していた。例えば、「旅行のこと、楽しそうです！」である。学習者には英語母語話者の非学習者と似たような表現のパターンが見られたので、開始部にもプラグマティック・トランスファーが起こったと考えられる。

英語からのプラグマティック・トランスファーが原因であるとは言えない言語形式の違いも見られた。日本語学習者と日本語母語話者のメールに現れた言語形式の種類と丁寧度が異なっていた。

以下、例(1)~(7)は、JJとEJの【断りの明示】の例である。

(1) 案内することができません。

例(1)は、全体的に多く使われていた動詞の不可能形である。

(2) どうしても都合がつきません。

(3) 都合がつきそうにありません。

(4) 時間をつくることが難しそうです。

(5) 観光案内ができなくなってしまいました。

例(2)~(5)の下線の部分は、JJが印象を調節するヘッジとして使用していた表現であり、48名のJJの内、7名が「どうしても」、6名が「そうにない」、5名が「難しそう」、3名が「てしまう」を断りの明示に使用していた。

(6) 鈴木先生に会議の後で会えなくてしまうと
 思います。

(7) 見物のはちょっと…

それに対して、23名のEJの内、3名が「ちょっと」、2名が「と思う」、1名が「てしまう」を使用していた。(6)と(7)はEJが使用していたヘッジの例である。つまり、JJとEJの【断りの明示】の使用頻度にはあまり差が見られなかったが、使用された言語形式の種類と数が異なっていた。

断る【理由】の使用についても、意味公式の使用と内容のレベルでは差が出なかったが、言語形式のレベルでは、日本語母語話者と学習者の間に違いが見られた。図1に示すように、学習者の方は、「ので」と「から」の接続助詞を多用したが、JJは全然使わず、より書き言葉的な連用中止形を使用していた。

【思いやり発話】にも、学習者に比べて、日本語母語話者はより固い謝罪表現を使用していた。日本語母語話者は「申し訳ない・申し訳ありません

図1 JJとEJが使用していた理由を表す接続詞

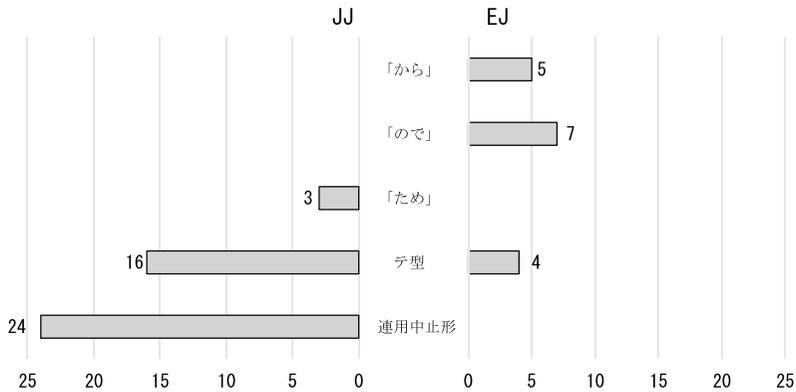
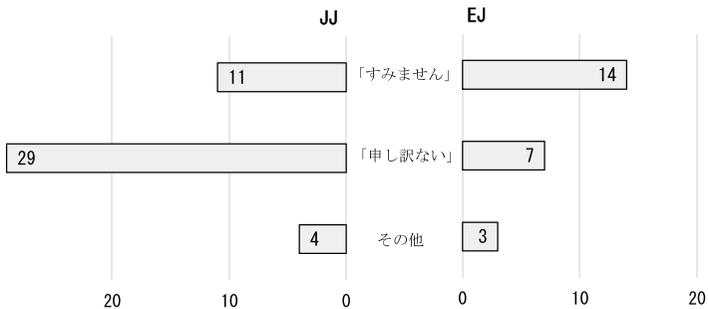


図2 JJとEJが使用していた謝罪表現



ん・申し訳ございません」を多用していたが、日本語学習者が一番多く使っていたのは「すみません」であった。「すみません」は、結構早い段階で決まり文句として習得され、また、「申し訳ありません」よりは形態的にシンプルであるという2点が原因になっていると想定される。

同じ意味公式でも、英語母語話者の日本語学習者と日本語母語話者の【断りの明示】、【理由】そして【思いやり発話】の言語形式の種類と丁寧度に違いがあるという結果が出た。しかし、これらの違いはプラグマティック・トランスファーの影響とは言えず、日本語能力またはインプット（教材など）の問題である可能性がある。

最後に、断りとは関係ないが、日本語学習者の「へ」と「より」の使用は日本語母語話者と異なっていた。以下、1名の学習者が書いたメール文である。

鈴木先生へ、

会議におめでとう！残念ですが、見物の時間もありません。よろしければ、いい見物会社を知ってる！それより、昼ごはんはいつでもいいです！

【名前】より

(EUS47-m3)

このように、普段手紙で使われる「へ」と「より」は学習者のメールで使用されていた。日本語母語話者のメールでは見られなかったが、23名の学習者のうち、10名のメール文にこの現象が見られた。英語のメールでは、手紙と同様に、「Dear〇〇」で始めるのが一般的なので、日本語でメールを書く機会があまりないオーストラリアとアメリカに住む日本語学習者は、日本語のメールには手紙と異なる点があることがわからなかったのであろうと考えられる。

5. おわりに

本研究は、日本語学習者が「断り」のメール文を書くとき、日本語母語話者と相違点があるか、母語からの影響があるかどうかを調べた。その結果、【提案】と【思いやり発話】の使用、【提案】の内容と開始部にプラグマティック・トランスファーが起こっていることが明らかになった。

また、言語形式の面においては、日本語学習者と日本語母語話者が使用していた言語形式の種類と丁寧度にも違いがあることが分かった。しかし、これらはプラグマティック・トランスファーの影響であるとは言えない。コーパスデータには、フォローアップインタビューは含まれていないため、その原因を探るにはさらなる検証が必要である。

断りの発話におけるプラグマティック・トランスファーが、日本語学習者の接触場面にどのように影響するのかを検証するためには、日本語母語話者による学習者の発話の評価も重要であると考え、今後の課題である。

謝辞

本研究は、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者の横断コーパス:I-JAS』を利用して行われたものである。また、本研究は、ニューサウスウェールズ大学に提出したオナーズの卒業研究の一部である。オナーズの指導教官のトムソン木下千尋先生とジェームズ・リー先生に謝意を述べたい。

参考文献

- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79: 41-52.
 王先哲 (2013) 「日本語母語場面における被依頼者の断り行動に対する予測とその手がかり：中国人日本語学習者と日本語母語話者の認知の比較」『日本語教育』155: 142-158.

- 迫田久美子（編）（2016）『海外連携による日本語学習者コーパスの構築－研究と構築の有機的な繋がりに基づいて－I-JAS 構築に関する最終報告書（International Corpus of Japanese as a Second Language）』 科研研究報告書 24251010 代表者 迫田久美子
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）「NINJAL-多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』 6(3): 93-110.
- 中井好男・船橋瑞貴・副田恵理子・向井裕樹（2018）「LINEでの日本語母語話者からの誘いを非母語話者はどう断っているか：「再誘い」を誘発する要因とその背景にある意識」『国立国語研究所論集』 14: 169-192.
- 蒙韞（2008）「中国人日本語上級学習者の語用論的転移の一考察：依頼に対する断り表現のポライトネスの表し方から」『国際開発研究フォーラム』 36: 241-254.
- 吉田さち（2013）「断りのメール文において韓国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる働きかけ方をするのはなぜか：言語管理理論の枠組みを用いた事例研究を通じて」『コミュニケーション文化』 8: 44-55.
- 吉富朝子（2012）「第二言語語用論を意識化するためのプロジェクト・ベース英語指導の試み」『上智大学言語学会紀要』 27: 37-54.
- ワラシー, クンランバー（2016）「タイ人ビジネスパーソンによる日本語の断りメールにおける言語行動様式とラポールマネジメント：日本人ビジネスパーソンとの比較を通じて」『大阪大学言語文化学専攻博士論文』
- Bardovi-Harlig, K. (2001) Evaluating the empirical evidence: Grounds for instruction in pragmatics? In G. Kasper & K. Rose (Eds.), *Pragmatics in language teaching* 13-32.
- Beebe, L.M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. Anderson & S.D. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language* 55-73.
- Henstock, M. I. (2003) Refusals: A language and cultural barrier between Americans and Japanese. PhD dissertation, Purdue University.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2009) Refusals in Japanese telephone conversations. In N. Taguchi (Ed.), *Pragmatic Competence* 199-226.
- Ohashi, J. (2000) Speech act realisations of Chinese and Australian learners of Japanese in request, thanking and refusal, particularly when observing imbalances of social equilibrium. In V. Mackie, A. Skoutarides & A. Tokita (Eds.), *Papers of the 10th Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia, Japanese studies: communities, cultures, critiques, Volume four: New directions in Japanese linguistics* 123-136.